

古代文字資料館蔵『ニュルンベルク年代記』(零葉、15世紀末) 解題

中村雅之

1. はじめに

ここに述べるのは15世紀末にドイツで出版された印刷本の一葉についてである。表裏それぞれの画像などについては、古代文字資料館蔵のウェブサイト(「ラテン文字」の頁にある「ニュルンベルク年代記」)で見ることができる。以下にこの資料の概要と、書体などに関するいくつかの事柄について述べたい。

ヨーロッパで1455年頃にグーテンベルクが活版印刷を開始してから1500年までに出版された最初期の印刷本は通常「インキュナブラ(揺籃期本)」と称される。「ゆりかご」を意味するラテン語に由来する名称である。聖書を除けば、この時期の出版物として最も流布したものの一つがハルトマン・シェーデルの執筆になる年代記である。この書は様々な名で呼ばれるが、1493年にドイツのニュルンベルクで出版されたことから「ニュルンベルク年代記」と称されることが多い。同じ年にラテン語版とドイツ語版が出版された。ラテン語版は1493年の初版本のほかに1497年にアウクスブルクで再版されており、古代文字資料館に蔵するのは、その再版本の中の一葉である。

当時は、出版された本の評判が良いと、すぐに海賊版が出るのが珍しくなかった。そのため初版本の発行者が破産に追い込まれることも少なくなかったという¹。アウクスブルク版もそのような海賊版と言ってよいが、決して粗雑な出来ではない。あえて再版本と呼ぶ所以である。

2. 概要

初版の『ニュルンベルク年代記』は約46×32cmの大判であるが(製本の仕方で若干の異同がある)、再版本はやや小型で、本資料は28.8×19.5cmである。初版本はインキュナブラの代表的なものとして、世界中の大学や図書館が所有している。日本では少なくとも12カ所に全13コピーが確認されている²。再版本についての所蔵状況は不明であるが、古書店やYahooオークションなどに一葉ずつ出品されるものは、みな再版本であると思ってよい。

内容は、天地創造から最後の審判までの記録である。キリスト教的歴史観では古代から現代を経て最後の審判までを第1期から第7期に分ける。イエスの誕生以降現在(=15世紀)までが第6期なので、大半が第6期に属することになる。古代文字資料館の所有する一葉

¹ 若松昭子(2008)「出版特認制度と海賊版—著作権法成立前史—」『図書館情報学研究』第4号。

² 雪嶋宏一(2001)『『ニュルンベルク年代記』ラテン語初版における若干の書誌学的問題』『早稲田大学図書館紀要』48号。pp.36-37による。

は、神聖ローマ皇帝フリードリヒ 3 世の伝記を記した部分にあたる。

3. 書体

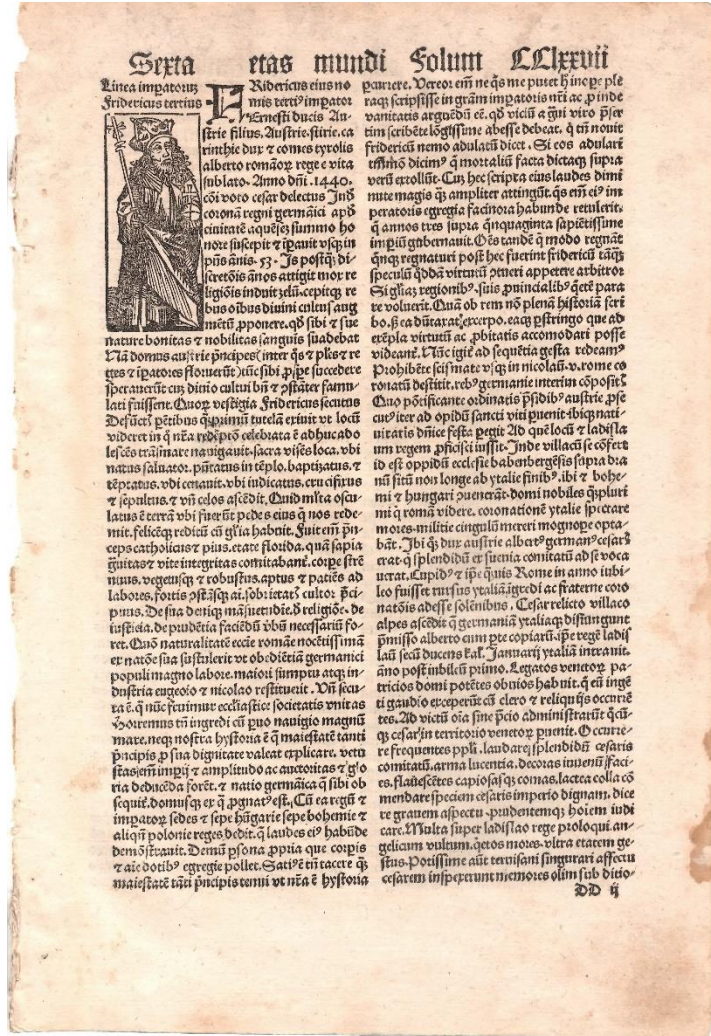
インキュナブラの特徴の一つは、中世の写本の書体と正書法を忠実に再現していることである。中世後期に教会の写字生たちによって用いられた書体は、角張って読みにくい“ゴシック体”であった³。そのためインキュナブラの活字も多くがゴシック体であり、本資料も例外ではない。15 世紀の印刷術はドイツに始まりイタリアで花開いた。現存するインキュナブラもドイツとイタリアの出版物が圧倒的に多い。イタリアではゴシック体は敬遠された。そのきっかけは、古典写本の収集家であったポッジオとニッコリが、古典作品の転写本作成にあたって、古風なヒューマニスト体を採用し、それまで用いられていた醜悪な書体を「ゴシック体(=ゴート風の、野蛮な)」と読んで軽蔑

したことである⁴。ヒューマニスト体は 800 年頃から用いられたカロリング体に範を取ったもので、ローマン体の原型である。ゴシック体の変種はドイツでは 20 世紀まで用いられたが(日本の旧制高校では「ひげ文字」と呼ばれた)、その他の地域では 16 世紀以降急速に姿を消した。

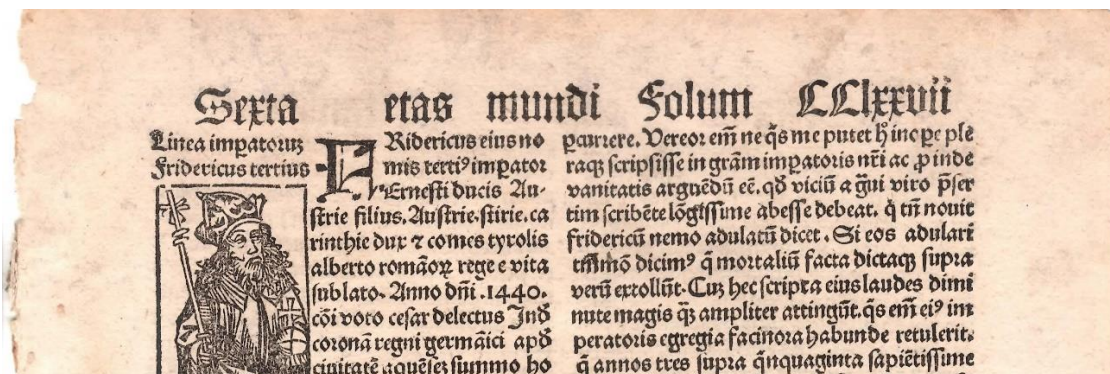
4. 字形

³ 日本語フォントのゴシック体とは異なる。15 世紀後半の西洋の書体は主にゴシック体とローマン体に大別され、それぞれに多くの変種がある。なお、ゴシック体はブラックレターとも称される。線が太く隙間なく綴られるため、ページ全体が黒く見えることからの名称という。

⁴ 高宮利行(2023)『西洋書物史への扉』岩波新書。pp. 104-107 を参照。



ポッジオらが敬遠したように、ゴシック体は甚だ読みにくい。文字と文字の間を詰めて綴られることに加え、字形も現在の我々にとっては馴染みのないものが多い。本資料の欄外標題 (=ヘッダー、head title) だけを見ても、解読が容易でないことは了解されよう。その部分について解説を加えておく。



太字で記された章の標題は「Sexta etas mundi」と綴られている。「sexta」は「第6の (sextus)」の女性形、「etas」は「時代(aetās)」の中性ラテン語形、「mundi」は「世界(mundus)」の属格形、あわせて「世界の第6の時代」ということで、キリスト教的な歴史観によって、イエス以降現代までの時代を指す。問題はそのあとの部分で、「Folum」と綴られているが、「F」の字形が非常に特殊であり、他の資料ではほとんど見かけない。しかも、本来「Folium」とあるべきだが、iを脱している。「葉」の意である。その右には丁付け (=葉数、leaf number) としてローマ数字が記されるが、これも読みにくい。「LL」のように見えるのは「CC」で、「CClxxvii」すなわち「277」である。「Fol(i)um」と併せて「277葉」ということ。各葉の表 (見開きの右頁) にのみ葉数が記される。したがって本資料の「277葉」は、ページ数に換算すると「553頁」ということになる。

5. 縮約形

インキュナブラは中世写本の筆記法にならい、多くの合字・縮約字や省略記号を用いる。あまりにも種類が多く、筆者にも全貌は定かではないので、有名なものだけを解説しておく。

- ① **et** <et (=英 and) > 上掲画像の本文第5行
- ② **Anno dñi .1440.** <Anno domini.1440. (主の年において [=A.D.]) > 第7行
- ③ **terti⁹** <tertius (第3の) > 第2行
- ④ **impator** <imperator (皇帝) > 第2行

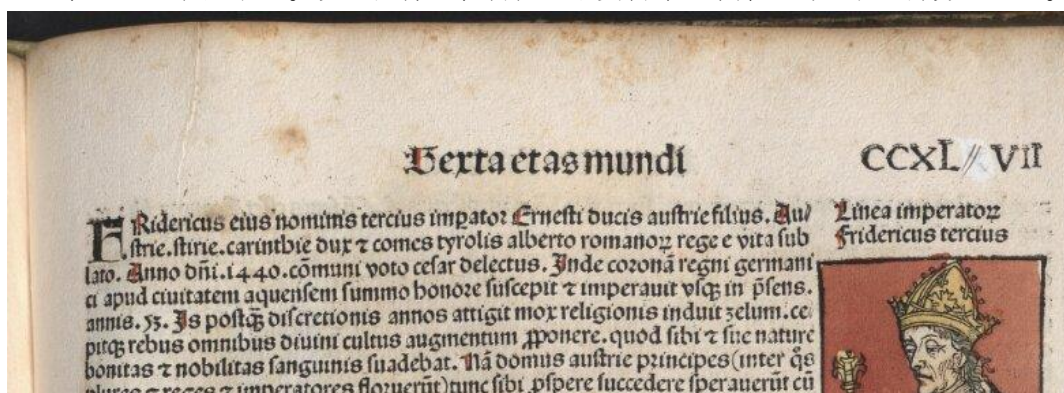
最初の①は<そして>を意味する<et>の合字。②は<domini>の部分が<dñi>と省略されている。<n>の上にチルダ記号を付して省略があることを示したもので、チルダ記号は頻用されるが、どの字を省略しているかは文脈によって判断する。なお、ここでの<Anno>の<A>はゴシック体としては普通の字形だが、慣れていないと読めない。A.D.1440はフリードリヒ3世が王位についた年。③は格語尾の<-us>を省略記号 (数字の9を小さくした形) で示したもの。挿絵のすぐ上には<Fridericus tertius (フリードリヒ3世)>と省

略しない綴りで記されている。④は<impator>の<p>の下部に横線を付けて<per>の省略であることを示したもの。結果として<imperator>と読む。

6. ラテン語の綴りの修正 (tercius → tertius)

『ニュルンベルク年代記』にはラテン語版とドイツ語版があるが、そのラテン語はいわゆる古典ラテン語ではなく中世ラテン語で書かれる。中世ラテン語は綴りや語法にバリエーションがあり、『ニュルンベルク年代記』の初版本と再版本でも多くの異同がある。字形や縮約形にもかなりの違いはあるが、ここでは発音に関わるものを一例だけ取り上げておく。

初版本については、ミュンヘンのバイエルン州立図書館がデジタル画像を公開しているので、それを利用する。次の画像は、古代文字資料館の零葉に対応する部分である。



段組みが異なるため葉数も異なり、初版本では右肩にローマ数字で「247」とある。本文第1行の第4の単語、および挿絵のすぐ上に **tercius** 「tercius」という語が見えるが、これは「第3の」を意味する語で、再版本では **tercius** 「tercius」と綴られている。古典ラテン語の「-ti-」は中世には [tsi] と発音されるようになったため、「-ci-」と綴られることがあった。初版本ではまさにその綴りだが、再版本では古典ラテン語風の綴りに改めている。

15世紀末は文化的にはいわゆるルネサンスの後期にあたるが、イタリアを中心として美術や文芸において古典回帰が進められた時期である。イタリアにおける書体の変革（ゴシック体からローマン体へ）については前述したが、ラテン語においても中世ラテン語から古典ラテン語への回帰が目指された。綴りや文法における修正は16世紀以降さらに強まることになるが、初版の「tercius」から再版の「tercius」への修正もそのような流れの一端を示すと言えるかも知れない。